

Maria Edgeworth's Early Lessons : In the Wake of Mrs. A. L. Barbauld's Lessons for Children

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2002-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 節子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4051

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



マライア・エッジワースの『はじめのレッスン』

—A・L・バーボールド夫人の読み方教育読本の流れを引き継いで—

中野節子

『はじめのレッスン』(*Early Lessons*)、マライア・エッジワースによって書かれた一連の物語集。最初は1801年にジョゼフ・ジョンソン社から出版される。単純な読み物教材と実用的な情報とを結びつけた革新的な本である」と評される作品がある¹。

マライア (Maria Edgeworth: 1767-1849) の父リチャード・ロヴェル・エッジワース (Richard Lovell Edgeworth: 1744-1817) は、アイルランドに広大な所領を有する大地主で、アイルランド議会の一員でもあった。フランスのJ・J・ルソー (Jean Jacques Rousseau: 1712-78) の教育理論の熱烈な信奉者であり、親友のT・デイ (Thomas Day: 1748-89) と共に新思想の啓蒙活動を行うかたわら、電信機、測量機を始めとする数々の発明や橋の設計・建設にも興じる多才な人物であった。最初の結婚でもうけた長女のマライアは、この父と一緒に、先祖の開設した町、アイルランド、ロングフォード州のエッジワースズタウン (Edgeworthstown) に住み、父の4度の結婚の結果生まれたたくさんの弟妹たちの教育を引き受けながら、父親の片腕となって、広大な所領の管理を取り仕切ってもいる。同時にまた、数々の家庭教育書やアイルランドの風俗小説等を書いて、当代一の売れっ子作家として活躍した文学者でもあった²。

その80余年にわたる生涯を通じて、約47巻の書物を残したといわれるマライア・エッジワース。彼女が扱った分野は父リチャードとの共著のかたちで出版された、歴代の継母たち (特にオノーラとエリザベス) も執筆にかかわったエッジワース家の教育書でもあり、実践に基づいた実地教育の理論をといたイギリス式教育書『実用教育』(*Practical Education*: 1798) に代表される数々の教育書と、かのW・スコット卿 (Sir Walter Scott: 1771-1832) に、『ウェイヴァリー』(*Waverley*: 1814) 等のスコットランドを舞台とした作品を書かせる原因ともなったと言われている、アイルランドの地を舞台とした最

初の風俗小説『ラックラント城』(*Castle Rackrent*: 1800)をはじめとする数々の小説群、その間をつなぐものとして、『両親のアシスタント』(*The Parent's Assistant*: 1796-1800)、『若い人々のための道徳話』(*Moral Tales for Young People*: 1801)、『はじめのレッスン』(*Early Lessons*: 1801)等に収録された、子どもたちの年代別に書かれた、膨大な数の物語群がある。

「子どもたちのために書いた、最初の古典的作家」(‘the first English classic writer for children’)とも称せられた、この多作な作家の子どものための読み物の特徴を、A・L・バーボールド夫人(Anna Laetitia Barbauld: 1743-1825)の、『子どものためのレッスン』(*Lessons for Children*: 1778)の流れを忠実に引き継いだ読み方教材としても定評のある、『はじめのレッスン』を中心に探ってみたい。

I

前述の如く、父リチャード・ロヴェルはルソーの思想に深く共鳴し、マライアの母アンナとの最初の結婚によって生まれた長男のリチャードを、『エミール』の思想に従って教育してもらうために、フランスのルソーのもとに送ったりしている。しかしながら結局この試みはうまくゆかず、息子教育の手痛い失敗への反省を込めて、自分の手による新たな教育の理論を構築してみようとした。具体的には、二番目の妻オノーラの生んだ子どもたちの読み方教育に自ら携わり、バーボールド夫人の『子どものためのレッスン』をテキストを使って、二人の子どもたちに6週間で読み方を覚えさせたりしている。この読み方教育の成功に大いに力を得て、父エッジワースのバーボールド夫人の仕事への絶大な尊敬が生まれていったと思われる。以後再三にわたって、彼の著作の中で、彼女への賛嘆の言及が見られるからである。このような試行錯誤を経て、エッジワース家の子どもたちの教育が始まったのであるが、彼らの成長に従って新たな教材開発の必要が起こってきた。「良質の紙、はっきりして大きな字体、たっぷりした行間をもった本の不足」(‘the want of good paper, a clear and large type, and large spaces’)を埋めたと言われたバーボールド夫人の、2歳から4歳までの子どもたちのための読み方教材の本の後に続く、より年長の子どもたちのための真摯な読み物教材が、緊急にエッジワース家の家庭教育の場で求められることになったのである。二番目の妻オノーラは、体こそは弱かったものの、才氣溢れる聡明な女性で

あった。やがて夫妻は協力して、ハリーとルーシーという子どもたちを主人公とした物語を生み出してゆく。いずれも子どもたちの毎日の生活、すなわち朝起きて、ベッドを直し、朝食をとり、自分たちの身の回りに起こるさまざまな事柄について両親に質問しながら、経験に基づく実際的な知識を獲得してゆくさまを、分かりやすい言葉で綴った物語である。物語の中のいくつかは、二人が私家版の形で出版した、最初の『実用教育』(1780)の一部として発表されている。しかしながら、1780年の4月に、オノーラは結核のため、志半ばにして亡くなってしまふ。結局のところ、彼女の残したメモをもとにした正式な『実用教育』の完成も、ただ単なる読み方教材に止まらず、子どもたちの理性的な探究心の育成をねらった物語の完成も、この優しく美しい継母オノーラを慕っていたリチャードの愛娘、才能豊かな娘マライアが引き継ぐことになるのである。こうして、オノーラの死後20年近く経った1798年に、エッジワース家の家庭教育に端を発し、イギリス流実践教育のバイブル的存在となった『実用教育』が、リチャード・ロヴェルとマライアという父娘の連名で出版され、イギリスはもとより、またたくまにヨーロッパ各地に広まっていった。一方オノーラの発想になる、ハリーとルーシーという二人の子どもたちを主人公とした物語の構想は、リチャードの友人T・デイに引き継がれ、『サンドフォードとマートン』(*The History of Sandford and Merton*: 1783)に結実される。そしてまた、その後1801年には、継娘マライアの手によって、この『はじめのレッスン』の本の中での見事な物語群を生むに至るのである。

1798年6月20日の従姉妹ソフィー・ラクストン宛の手紙の中でマライアは、「たった今、あの「紫色の広口びん」(‘The Purple Jar’)程の長さの、全てロザモンドを主人公にした小さなお話を含む一冊の本を書き上げたところで」³と報告している。それから一年半ばかり経った1800年の12月2日の手紙には、「ハリーとルーシーの物語二巻を含む、『はじめのレッスン』の最初の二つの部分が、今私たちの手元に届いたところです。ほどなくフランクとロザモンドの物語も到着することになると思います」⁴と報告されている。忙しい両親に代わって、次々と生まれてくる小さな弟妹たちの教育を手伝うようになっていた娘のマライアは、既に1796年に、児童読み物の書き手としての彼女の名前を一躍世に広めることになった小さな物語集、『両親のアシスタント』(*The Parent's Assistant*)を出版していた。「小犬のトラスティー」

「オレンジ売りの男」、そして「紫色の広口びん」などの三つの物語は、もともとはこの『両親のアシスタント』の一版と二版に収録されて発表されたものである。しかしながら、1800年の第三版からは姿を消し、代わってこれら最初の二つの物語が、翌年1801年に世に出た『はじめのレッスン』の第四部「フランク」の最後に、そして「紫色の広口びん」は、『はじめのレッスン』第三部「ロザモンド」の最初の物語として収録されるようになった。版を重ねるにしたがって、物語の順序には変化が見られるものの、全10部からなるこの本は継続して出版され、1820年までに7版を重ねていた。

その後25年間にわたって、『はじめのレッスン』に登場して活躍した4人の子どもたち、フランク、ロザモンド、そしてハリーとルーシーの名を冠した独立した物語集が次々と出版されてゆく。1814年には『はじめのレッスン続編』(*Continuation of Early Lessons*)が、1821年には『続ロザモンド』(*Rosamond: A Sequel*)が、翌1822年には『続フランク』(*Frank: A Sequel*)が、そして『ハリーとルーシー完結編』(*Harry and Lucy: Concluded*)の出版は1825年のことであった。

この物語の中で活躍する4人の子どもたちはどんなふうに描かれているのであろうか。次に、詳しく考えてみたい。

II

1. ハリーとルーシー (Harry and Lucy)

『はじめのレッスン』の第一部に収録されている物語の主人公は、ハリーとルーシーという兄妹である。物語は次のように始まる⁵。

「それぞれの文字がもつ音を全て学んだ小さな子どもたちは、単語を読むことができるようになり、この本の中に語られている内容を理解することができます。

ハリーはルーシーの弟、ルーシーはハリーの姉です。ハリーはちょうどその頃、父さんの家に戻ってきたところでした。小さな子どもだったとき、叔父さんのところに預けられていて、ずっとそこで叔父さんと暮らしていたからです。

ルーシーは母さんの部屋の近くの小部屋の小さなベッドで眠り、ハリーは別の小部屋の小さなベッドで眠ることになりました。」

朝起きると、二人の子どもたちはそれぞれに自分で寢床を整えてから、朝御飯をとることになっていた。けれどハリーは寢床のとのえ方が分からず、父さんに教えてもらわねばならない。叔父さんの家では、そんなことをしていなかったからだ。やがてルーシーは母さんの後について、酪農室や庭で家事の実地教育をうけ、ハリーの方は父さんの後について、村の鍛冶屋などで野外の実地教育をうけることになる。

続く「ハリーとルーシー」第二部の物語の冒頭は、次のように始まっている。

「夏が過ぎ、秋が過ぎ、そして冬が過ぎ、また春となりました。

ハリーとルーシーもそれぞれに、一つ歳をとったことになります。

この一年の間に、二人は背もずっと高くなり、すっかり丈夫になり、以前には分からなかった、多くのことも学びました。

もうすらすらと本文を読めるようにもなりました。そのため、冬の夜の間中、母さんが二人に貸してくれた本の中の短いお話を読んで、自分たちだけでも少しだけ楽しむこともできるようにもなったのでした。簡単な計算も習いました。足し算や引き算ができるようになったのです。」

以下、主としてハリーは父親と、そしてルーシーは母親という組合せで、お互いに会話を交わし合いながら、自分たちの周りを取り巻く大宇宙のことを学んだり、売り物のたまごを割ってしまった貧しい女の子を助ける、身近な小さな慈善行為の大切さが論じられてゆく。そして物語の最後は、

「ハリーとルーシーは、叔父さんのところで見聞したことの全てを楽しんだのでした。二人ともとてもお行儀よくしていたので、叔父さんは父さんと母さんに、今度来たときには、二人をフラワー・ヒルに連れて行きたいとお願いしてくれました。

みんなはその晩、暗くなる前に家に戻り、月が出る頃には眠りについたのでした。

こんなふうにして、ハリーとルーシーの過ごした三日の物語が終わり

ました。一日目は、ハリーが5歳でルーシーが6歳であったころの出来事です。そしてあとの二日の物語は、それから一年後、ルーシーが7歳でハリーが6歳であったころの出来事です。」

と結ばれている。

2. フランク (Frank)

『はじめのレッスン』には、フランクを主人公とした4部の物語が収録されている。第一部の冒頭は、次のように始まる⁶。

「一人の小さな男の子がおりました。名前をフランクといいました。男の子には、父さんと母さんがおりました。二人はとても親切でした。男の子は二人が大好きでした。二人と話したり、散歩したり、一緒にいることがとても好きだったのです。フランクは二人がしてもらいたいと思っているように振る舞いたいと思ひ、してもらいたくないと思っていることはしないようにと心がけていたのです。父さんか母さんが男の子に、「フランク、ドアを閉めて」と言うと、すぐに走ってゆき、ドアを閉めました。二人が、「フランク、そのナイフにさわらないで」と言うと、男の子はナイフから手をひっこめ、さわろうとはしなかったのです。— とても素直な小さな男の子だったのでした。」

続いて収められているのは、次のような7つの物語である。

テーブルの足をいたずらするフランク。実際の例を示しながら、テーブルが倒れるととても危険、それに器物破損の害もあるしと諭し、やめさせる母親の姿が描かれる(第一話)。母と野原に出てゆくフランク。母親は実物を示しながら、じゃがいもの食用になる部分、茎や花の区別を教える(第二話)。他の人の所有する庭に入れてもらうフランク。お行儀を教える母親は、上着の縁で花を傷めないかと心を配る息子の姿に喜ぶ。悪戯ばかりするので、庭に入れてもらえない男の子の例をあげ、「自分の持ち物ではないものに手を出してはならない」と教える。再び同じ庭に出かけたフランクと母親。一人の少年が柵の踏み越し段に腰掛けている。落ちた木の実を返してやるフランク。庭師の手伝いをするフランクは、「母さん、僕も役にたつんだよ」

（‘Mamma, I am – some use.’）と喜ぶ。風を上げている少年。父さんへのお土産のチェリーを落としてしまうフランクに、この少年がチェリーを届けてくれる。「僕、この木の実のように、あらゆることに正直になろう」と決心するフランク（第四話）。父さんは手紙書きに忙しい。蠟で封印をする作業を手伝うフランクに、火の扱い方を教える。母さんの注意にもかかわらず、蠟を指に落とし火傷をしてしまうフランク。しかし父さんは、息子のもう一度挑戦してみようとする精神をほめるのだった（第五話）。フランクは自分の力で風を作ろうと頑張っている。台所に連れてゆき、パンが出来上がるまでの過程を見せる母親。父さんと一緒に製材所の見学に出かけたフランクは、大工の仕事に大いに感心する（第六話）。風を作り上げたフランク。「風がなぜ、空たかく舞い上がるのかを知ることができたらなあ」と、初めての知識欲の目覚めを予感させて（第七話）、第一部は終わる。

続いて、雨の日のフランク。詩の暗唱をするフランクのエピソード（第二部）、父さんの作ってくれたぶらんこで遊ぶフランク（第三部）等が語られ、最後には本の中の物語のほとんどが読めるようになって喜ぶフランクの姿が描かれて、第四部が終わっている。

3. ロザモンド (Rosamond)

物語が書かれた1798年の段階で6歳であるとされるフランクに対して、もう一人の主人公ロザモンドの方は、7歳の女の子として登場してくる。いささか良い子過ぎる感のある少年フランクに反して、目の誘惑に引かれて手痛い失敗を冒しては後悔する少女ロザモンドの姿が、妙に共感呼んで印象的である。『はじめのレッスン』には、第一部から三部まで、「ロザモンド」の物語が収録されている。すなわち、「紫色の広口びん」、「二つのプラム」、「不運な一日」、「リヴェッタ」、「とげ」、「ヒヤシンス」、そして「うさぎ」の、総計7つの話である。物語のそれぞれに、独立した題が付けられていることから分かるように、一つひとつが独立した楽しい読み物となっている点が、ハリーとルーシー、そしてフランクの活躍する他の物語との違いであろうか。単なる教育のための物語と、娯楽を意識した読み物との差が感じられるところである。

一つの作品を具体的に取り上げて、その魅力の一端を詳しく考えてみよう⁷。

- ・「紫色の広口びん」(‘The Purple Jar’)

「7歳位の小さな女の子ロザモンドが、母さんと一緒に、ロンドンの街を歩いていました。通りがかりに、いくつかの店のショウ・ウィンドウを覗いては、さまざまな物を眺めました。けれど彼女にはその使い道はおろか、名前さえ分からなかったのです。よく見てみよう、立ち止まりたいとも思ったのですが、街にはたくさんの人がいて、荷車や馬車や手押し車で混み合い、母さんと手が離れてしまいそうで心配でした。」

と物語は始まっている。やがてロザモンドは玩具屋の店先を覗き、「こんな綺麗なものを全部手に入れられたらいいのに」と考える。帽子屋の店頭には、リボンやレースや飾りの造花が並んでいる。けれど母さんは、「そんなものは欲しくないわ」と言う。宝石店の店先では、「一体それがどんな役に立つの」と質問されてしまう。「先ず買ってみてから、その使い道を考えるの」と答えるロザモンド。靴のバックルを売る店を見つけ、「あれなら役に立つこと請け合い、一つ買いましょよ」と頼むロザモンドは母さんに、「もうすでに一つ持っているから、別のは要らない」と断られてしまう。やがて、薬屋の店先に並ぶ、色とりどりの薬びんにすっかり心を奪われるロザモンド。一つ買ってほしいと頼むと、「どんな役に立つの?」と質問する母さん。「花だって入れられるし、飾り物にしても綺麗だわ」と答えると、「近くに寄って、良く確かめてごらん。きつとがっかりするわよ」と助言する母親。やがて、ロザモンドの履いていた破れた靴の穴から、小石が入り込み、ちくちくと痛み出す。「あのびんか、それとも靴か、どっちか一つを買ってあげるから選んでごんなさい」と言ってくれる母さん。ロザモンドはさんざん迷った末、「やっぱり、あの綺麗なびんが欲しい」と決めてはみるが、「母さん、そんな私を馬鹿な子だと思わない?」と心配するロザモンド。母さんは、「そんなこと分からないわ、ロザモンド。でも何か一人で決めなければならぬときは、自分が嬉しいかどうかで決めるべきよ。そしたら誰がどう思おうと問題にならないでしょ」と答えるのである。とうとう念願の小びんを手に入れ、意気揚々と家に帰ってくるロザモンド。しかしいざ彼女が、このきれいな紫色のびんに花を入れて飾ろうと中の液体を流した途端、紫の色は消えてしまい、美しい広口びんはただの平凡なガラスびんになってしまうのだ。美しい色彩は、中に入っていたいやなにおいのする液体の色だっ

たのだ。すっかりしょげかえるロザモンドに母さんは、「決めるときには、まずちゃんと確かめなさい、さもないとがっかりするわよと言ったのに」と素っ気ない。こうしてロザモンドは、その後一ヶ月の間、破れ靴の穴から入り込んでくる小石のために、痛む足を引きずって過ごさねばならなかった。その上あんなに楽しみにしていた温室の見学も、「足をひきずって歩くような、だらしのない子は連れて行くわけにはいかないね」と言う父さんの一言で、あきらめなければならなかったのである。そして「結局、あのびんよりも靴の方が、私にはずっと役に立ったんだわ。あまり自信はないけど、次に選ぶときには、きっともっと賢くなれると思うわ」と答えるロザモンドの言葉で、この手痛い彼女の失敗談は結ばれている。

それが自分にとって有用であるかどうかを徹底的に吟味し、よく調べた上、自分の信念に従って選びとり、結果についての責任を最後までとらせるという母親の教育姿勢は、いささか頑な面も感じられはするものの、見事としか言いようがない。一方で美しい色彩や目新しさに心を奪われてしまうロザモンドの子どもらしい姿が、生き生きと印象的である。小さいながらも、さまざまな誘惑や問題を抱えて悩んでいる、生身の存在としての子どもの姿が、共感をもって迫ってくるからではないだろうか。あくまでも道徳優先といった限界はあるとはいえ、エッジワースの名前が挙げられるとき、その優れた物語作りの技術を示す一つの例として、真先に上げられる作品であることも頷ける。

1814年出版の『続はじめのレッスン』に収められた「ロザモンド」の物語には、これらの他に、別の9つのお話が収録されている⁸。いずれもローラ、ゴッドフリーという兄妹とロザモンドを中心とした、日常の家庭生活のエピソードを綴った物語である。賭をするスリルや楽しさと共に、その危険をも教える「賭事」という物語の最後に置かれた母親の言葉、「賭けるという行為が偶然性の問題となった場合、お金や物を賭けるということが、賭事そのものへの愛着になりやすいこと、また賭けることが意見の違いに基づくものとなったときには、それが勝利への執着になりやすいことが心配だわ」に明らかかなように、いづれも子どもたちに、将来の彼らの社会生活の中で必要となってくるであろうさまざまな教訓を教える、一種の「道徳話」(‘Moral Tales’)であることに変わりはない。次の「お楽しみパーティー」でも、「ほどほどに夢中になること」の大切さが、母親の「前もって、過度な幸せを期

待してしまうと、後で失望することになるわよ」という言葉の中に説かれているのである。また「黒いボンネット」のお話でも、人を見かけで判断し、好悪の感情を露にする危険が、いささかスリラーめいた物語の中で示されてゆく。続くお話は、前の物語「黒いボンネット」で登場したエガートン夫人所有の「インド風のキャビネット」の引き出しを一つひとつ開けながら、オオムガイ、珊瑚、そして中国の玩具等を引き合いに出して、物語が展開されてゆく。結局は、最後に置かれたゴッドフリーの言葉「この精巧な中国の玩具より、父さんが見せてくれた大きな本物の機械の方が、僕はもっと好きだな、だってその方がずっと役に立つもの」に、教材としての読み物の限界を見ると同時に、一方そんな兄の指摘で、中国の玩具に対する自分の素朴な驚異の念を揺るがされ、大いに戸惑うロザモンドの姿に人間的共感を覚えるといった、文学的香りも感じられる作品となっている。まさに大人のもくろみを具現する教育読み物と、単純に子どもの共感に訴える娯楽読み物との境界にある作品である。

生徒たちの大好きな先生である、バサースト牧師へ贈るお別れのプレゼントの銀のカップ。それを買うために、時間外の労働を重ねてその費用を捻出しようとする、工場で働く健気な子どもたちの物語「銀のカップ」からは、兄妹の間で緊張して暮らしている、小さなロザモンドの悩みが一段とクローズアップされてくる。また、生活上の基礎的な訓練をする母親に代わって、専門的な知識を説明する父親の登場が多くなってくるとも目立った特徴である。しかしながら、従来から踏襲されてきた、文学的共感を伴いつつ、実際に役に立つ知識を与えるといった点には、一切の変更はない。

Ⅲ

この『続はじめのレッスン』(1814)は、4歳になったばかりの幼い弟フランシスに捧げられている。献辞の中でマライアは、16年前に、この本の前編にあたる『はじめのレッスン』を、当時同じ4歳であった彼の兄ウィリアムのために書き下ろしたときのことを懐かしく思い出している。こうしてマライアは、年々増え続けるエッジワース家の小さな弟妹たちに読ませるための物語を、書き続けていったのである。

同じ本に添えられた「お母さんたちへ」という前書きの中で父リチャード・ロヴェルは、娘マライアがフランクとロザモンドを主人公とした物語を書く

34年も前に、自分がハリーとルーシーのお話の最初の部分を書いたことを、明らかにしている。物語は、まずフランクから始めて、次にハリーとルーシーの最初の部分を、それからロザモンド、そしてハリーとルーシーの第二部へと読み進めるのがよいだろうと提案されている。けれど必ずしも決められた順序で読む必要もない、子どもたちの反応をみて読んでゆくことが大切で、子どもたちの理解に余るようなものを早急に与えてはならないとも強調されているのである。読み物教材としては、子どもたちの健全な道徳心を育み、知識への興味を作り出していくようなものが望ましく、その過程の中で面白く興味を持たせる配慮がされているものがよいとも言っている。あくまでも机上の理論に終始せず、必ず行動を伴って知識を身につけさせること、初期の教育においては問答形式で学習がなされるのが効果的なこと、充分余裕のある家庭においては両親自らが初等教育を行うことが望ましく、そうできない場合には、適切な言葉と綺麗なアクセントで話すことのできる家庭教師を雇っての教育が必要であろうと説かれている。一日の中で、小さな子どもたちの勉強に集中できる時間は2時間が限度、しかもその三分の一の時間はリラックスのために当てられるべきだという具体的な指摘もある。望ましい読み物教材としては、まずバーボールド夫人の『子どものためのレッスン』を、続いて『散文の頌歌』(*Hymns in Prose for Childeren*: 1781) 等が上げられている⁹。

一方、『はじめのレッスン』作品群の最後の本となった、『ハリーとルーシー完結編』(1825)に添えられた、「両親へ」という序文の中で、娘マライアは、ここに収められた物語は10歳から14歳まで位の子どもたちに向けられたお話であること、ハリーとルーシーを主人公にした最初の物語は父リチャード・ロヴェルによって約50年まえに書かれたものであること、それは正確な初歩的な科学の知識を子どもたちに紹介した最初の仕事であったことを記した後、次のように述べているのである¹⁰。

「この『はじめのレッスン完結編』で、私は一つの科学、または最初の原理を越えたなにかを教えることよりも、私の父が始めた目的、すなわち注意すること、観察すること、推理すること、そして発明の力をつけることを、優先しようと努力してみました。最も重要なことは、知識への渇き('a thirst for knowledge')を刺激することなのです。それがないと

したら、溢れるまでの潮をどんなに唇に注いでやったとしても、無駄になってしまうことでしょう」

努力することなしに、知識を身につけられるような錯覚を子どもたちに与えるのは偽りであり、害にもなるという指摘や、兄弟とか仲間たちと協力しあって教え合うことの大切さ等は、いずれも長い間のマライア自身の実践の努力から生まれた貴重な助言である。

1801年から1825年まで、マライア・エッジワースによって書き継がれた『はじめのレッスン』シリーズは、とりもなおさずエッジワース家の親と子どもたちとの見事な協力の下に書かれた、家庭を中心とした教育書の総決算ともいべき作品であり、同時にまた、楽しくためになる読み物でもあったことが分かる。

『はじめのレッスン』の出版は、1805年と1808年とのアメリカ版を始めとして、フランス語版の出版が1803年から46年まで続き、その後オランダ語版(1810)、イタリア語版(1834)、そしてドイツ語版(1846)へと翻訳されて、全ヨーロッパに紹介されていった。そんな意味からも、児童文学の初期の歴史の上に、この小さな本が果たした役割は、はなはだ大きかったと言える。

17世紀、原罪から子どもたちを救おうという熱い願いをもって書かれた、J・ジェインウェイ(James Janeway: ?1636-74)の『子どものためのお守り札』(*A Token for Children*: 1672)から始まって、I・ワッツ(Isaac Watts: 1674-1748)の『聖なる歌』(*Devine Songs*: 1715)に見られるような、強烈な宗教色をいささかも感じさせず、専ら子どもたちの科学的な能力を、理性に基づいて育て上げようとしたところが、マライアの物語の最大の特徴と言える。この点は、バーボルト夫人、そしてS・トリマー夫人(Sarah Trimmer: 1741-1810)の作品には見られない点であった。やがてエッジワース流の科学的読み物の伝統は、M・ギャティ(Margaret Gatty: 1809-73)へと引き継がれ、また文学的香りのする子どもの物語の伝統は、その娘であるJ・H・ユーイング夫人(Juliana Horatia Ewing: 1841-85)の数々の作品の中で、さらなる花を咲かせることになるのである。

注

1. Humphrey Carpenter & Mari Prichard, (eds.), *The Oxford Companion to Children's Literature* (Oxford: Oxford University Press, 1984), p. 161.
2. 以下, マライア・エッジワースに関しては、『ひなぎく的首飾り』(ニュー・ファンタジーの会編, 透土社発行, 1992年)収録の私論, 「マリア・エッジワースー父の愛娘として」参照。
3. Augustus J. C. Hare, (ed.), *The Life and Letters of Maria Edgeworth* (London: Houghton, 1895; reprint: New York: Books for Libraries Press, 1971), Vol.I, p. 56.
4. *ibid.*, p. 75.
5. 以下, 使用テキストは, *Early Lessons*, 'Harry and Lucy' (London: J. Jhonson, 1809) による。
6. 以下, 使用テキストは, *Early Lessons*, 'Frank' (London: J. Jhonson, 1809) による。
7. 以下, 使用テキストは, *Early Lessons*, 'Rosamond' (London: J. Jhonson, 1809) による。
8. 以下, 使用テキストは, *Continuation of Early Lessons*, 'Rosamond' (London: R. Hunter, 1816) による。
9. *Continuation of Early Lessonns*, (London: R. Hunter, 1814) , 'Dedication to My Little Brother, Francis Beaufort Edgeworth' & 'Address to Mothers' 参照。
10. *Harry and Lucy Concluded*, (London: R. Hunter, 1825), 'Preface', ix-x.

